

プラスチックごみ問題

どう減らし、どう活かすか

2019/7/6 中部環境を考える会・シンポジウムに参加して CANレポーター 大村昌宏

中部環境を考える会・シンポジウムが 7月6日(土)名古屋(中部大学鶴舞キャンパス)にて開催された。テーマは「伊勢湾のプラスチック汚染 ～マイクロプラスチックの脅威～」。

今、「プラスチックごみ」は話題性の高い問題だ。大阪でのG20でも取りあげられ、マスコミの報道も多い。死んだクジラや亀のお腹の中のプラスチックごみが大写しされる映像は衝撃的だ。

基調報告は、千葉賢さん(四日市大学教授)。プラスチックごみ問題の概要を分かやすく解説してくれた。そして千葉さんにあと3人が加わりパネルディスカッションが行われた。加わったのは、坂野一博さん(藤前干潟クリーン大作戦実行委員会)、谷川浩之さん(名古屋市環境局)、浅野正彦さん(PETボトルリサイクル推進協議会)だ。

それぞれの最新の情報を知る事ができた。とりわけ海洋への流出は深刻のようだ。しかし今回のシンポへ参加していくつか疑問が沸いてきた。そもそも私達の日常生活に目を転じると、プラスチック製品が溢れかえっているのだ。一部の企業が、ストローをプラスチックから紙に代えましたとピーアールしているが、それで済む問題ではない。今の豊かで便利な私達の暮らしは、プラスチック製品で支えられていると言っても過言ではない。マイクロプラスチック問題も、生体への悪影響が懸念され研究が始まったばかりでよく分かっていないのが現状のようだ。

今回のシンポの様子を紹介しつつプラスチックごみ問題を考えてみたい。



伊勢湾へのプラスチックごみ流出

基調報告した千葉さんの専門は流体力学。伊勢湾の海洋汚染問題について長年研究されてきた。木曾

三川、名古屋市から流出したプラスチックごみは、時計と反対回りに三重県の沿岸に漂着するとのことだった。

藤前干潟の会の坂野さんは、庄内川の両岸の白いベルト状の写真を紹介。何十年もの間、葦の間に引っかかっていたプラスチックごみが、高潮によって浮き上がり、土手の上の方に出てきたと、白いベルトの正体が大量のプラスチックごみであったと報告。生物によって分解されないプラスチックは、長い年月をかけて溜まり続けていたのだ。海洋に流出すれば、そのまま海中に漂いかつ海底に溜まり続けることになる。海洋生物がこれ飲み込むと、そのまま排泄されればいいが、消化器官内に引っかかれば、悪さすることになる。



リサイクルは運搬にコストがかかる

PETボトルリサイクル協会の浅野さんは、ペットボトルのリサイクルがきちっと確立されている旨の現状を報告された。リサイクルという点ではペットボトルは優等生だ。コストの面では運搬費が一番かかるという。

名古屋市環境部の谷川さんは、20年前の藤前干潟埋立計画の中止、市民と共に「ごみ分別」と「減量」に取り組んできた歩みを報告、今「レジ袋の有料化」が課題になっているとの事だった。使い捨てから分別リサイクルへ、いずれにせよリサイクルには手間とコストがかかるのだ。

これ迄、分別されたプラスチック類の多くは原料として中国に輸出されていた。ところがその中国が、「ごみ」を中国国内に入れるな、と輸入をストップした。行き場を失った分別プラスチックごみは、溜まり続けている。一方、日本では発電用の原料として分別プラスチックごみを活用しているが、CO2 排出を増やすだけの指摘もある。

プラスチックごみの焼却について

分別せずそのままプラスチックごみが混ざったまま「焼却すればいいのでは？」との会場からの質問に対し、名古屋市の谷川さんは焼却炉が壊れるリスクがあると消極的だった。

ダイオキシン排出が問題になったおり、多額の予算を使って焼却炉の更新を多くの自治体が行った。高

温での焼却によりダイオキシンを発生させない施設への改修や新設だ。施設によっては、発生する熱量を使って発電をする機能もある。ようは不法投棄や海洋への流出をさせないことが肝心ではないのか。焼却が可能な施設を持つ自治体は、無駄な分別を市民に強要せず「きちっと」焼却すればいいのではないのか。不法な投棄が問題なのだ。

生分解性が無いゆえのメリットとデメリット

プラスチックごみ問題を考える上で、整理しておくことがある。それはプラスチックの特性だ。プラスチックはもともと自然界にないもの。人間が化学工業の力で石油から人工的に合成したものだ。

安価で大量生産できること。成形が容易であること。微生物に分解されない＝「生分解性」がないことが特徴だ。

この「生分解性のない」特質は、食品工業、医療の分野で有益だ。食品の流通では、プラスチックフィルムのおかげで鮮度を保ち、食品の劣化を防ぐことができる。食中毒の発生を防止するのにも大いに役立っている。医療の分野でも使い捨ての注射器や医薬品の保管流通に活用されている。生分解性がないゆえに食品衛生、医療の分野で私達の命と健康を守る上で大いに役にたっているのだ。

一方、生分解性がないゆえに廃棄しても焼却するか、コストをかけて化学的に処理しなければ、そのまま残り、溜まり続けることになる。海洋へ流出すれば海洋生物に悪さをするようになる。

化学工業は、生分解性のあるプラスチックも生み出している。トウモロコシ等植物由来で生産されたプラスチックは、分解される。しかしコストが高く普及していないのが現状だ。

「安価で、便利、容易だから」を見直す

プラスチックでなければ困るもの。これは使い続ける。一方、代替可能なものはやめる。たとえば、買物袋を持参すればレジ袋は必要が無くなる。産業活動、くらし全般での「仕分け」が必要のようだ。「安価」「便

利」という基準でプラスチックを生産する時代は終わらせる。プラスチックが悪なのではない。要は、どう活用しつつ、どう減らすかなのだ。プラスチックごみ問題は、私達の暮らし方に関わる問題なのだ。

